



## 歯学部創設30周年



発行責任者: 歯学部長 宮崎 隆, 編集責任者: 広報委員長 五十嵐 武  
〒142-8555 東京都品川区旗の台1-5-8 TEL: 03-3784-8000  
ホームページ: <http://www.showa-u.ac.jp>

昭和大学歯学部は創設30周年を迎えました。

### 巻頭言

齲蝕・歯内治療学教室 久光 久

「偽」の年2007年も残り僅かとなりました。現在、日本は高齢社会に突入し、高齢者の健康を支える口腔の重要性が高まっています。8020運動を掲げて多くの歯科医師が日夜奮闘したおかげで80歳の平均残存歯数は約10年前の5~6本から10本弱と大幅に増加しましたが、まだまだ目標達成までは程遠い状況です。高齢者にとって料理を美味しく味わって食べられることはQOL(生活の質)を高めることにつながります。料理は味だけではなく歯ざわり、歯ごたえも大切であり、がんばる時には歯を食いしばることも大切です。良く噛むことで、脳の刺激にもなり、歯を健康に保つことで全身疾患の予防にもつながります。歯の大切さをより多くの国民に認識してもらい必要性を痛感しております。



さて、歯を失う2大疾患の齲蝕と歯周病は、ともに細菌感染による疾患です。口腔内の環境改善によりある程度予防可能な生活習慣病であり、患者の自己責任の度合いの大きな疾患でもあります。ライオンが2001年に東京丸の内(T)とニューヨーク(N)で30~40歳の男性ビジネスマン1,000人を対象に興味あるアンケート調査を行っております。その結果は、自分の歯に自信がある(T:8%, N:69%), 歯の健康診断の習慣がない(T:62%, N:8%), 虫歯や歯周病の治療のために歯科医院に行く(T:100%, N:35%)。この結果から、多くのアメリカ人は虫歯や歯周病にかからないようにするために、そして日本人は虫歯や歯周病にかかってから歯科医院に行くという大きな違いがあることが分かります。アメリカでは歯が汚い人や肥満の人は、自己管理ができないとみなされて、企業の採用試験や、昇進の時に極めて不利になるそうです。日本人は残念ながら口の汚い民族と見られているようです。

ところで、医科においては平成20年4月から疾病予防、特に糖尿病を中心とする生活習慣病の予防を目指して「高齢者の医療の確保に関する法律」に基づき特定健診・特定保健指導が実施されます。この制度は是非とも歯科にも導入すべきです。高齢者に限定せず、若いうちから歯の喪失を予防するために定期的な健診と健康指導を受けることを義務付ける

ことによって、国民の口腔環境は大幅に改善するとともに、歯科医師数は過剰から不足に転じると思われる。また、8020は容易に達成され、8028も夢ではなくなります。「予防にすぐる治療なし」の言葉を噛み締めつつ、新しい年が歯科界にとって明るい年になることを願っております。

### 4学部横断3年次 PBL シナリオ作製 WS 開催

歯科放射線学教室 関 健次

11月15日の創立記念日に標記WSが、4学部(医、歯、薬、保健医療)から4名ずつ、さらに富士吉田教育部から2名の18名が参加して開催されました。これは来年の12月に実施されるPBLの準備の一環として開催されたものです。歯学部からは私以外にも村田先生(口腔衛生学)、下平先生(高齢者歯科学)、平野先生(口腔リハビリテーション科)が参加いたしました。

内容は、シナリオの作り方の説明があり、その後、各学部1名ずつ入った4班に分かれて、実際の作業を行いました。ただし、一から始めたのでは時間がかかるため、予めたたき台となるシナリオが用意されておりました。テーマは4学部が関われるということで「精神神経疾患」として2テーマ(脳梗塞・パーキンソン病)、「骨・関節疾患」として2テーマ(骨粗鬆症・リュウマチ)の4テーマが選ばれ、各班に割り振られました。実際の作業に入ると、学生の背景として、学部により講義の進みかたの差があること、自分がどのように関わるかという意識の違いが壁となって立ちほだかります。PBLのシナリオづくりの難しさもありますが、「4学部の学生が同じように関われるように内容を工夫する」ことの難しさを痛感いたしました。



WSは1日だけでしたが、普段交流のない学部の方々と交流できたことも大変有意義でした。今回のPBLは、教育の場でも4学部の教員の交流が行われるため、昭和大学のさらなる活性化につながるものと感じました。

## 上條奨学賞(研究業績)を受賞して

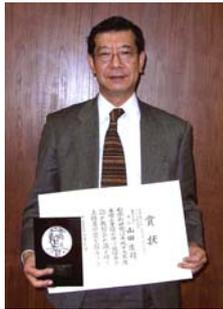
歯科薬理学教室 山田 庄司

上條奨学賞(研究業績)を受賞できたことを光栄に存じます。この受賞は私一人に対するものではなく、歯科薬理学教室の研究活動に対するものであると考えています。

当教室は「硬組織の生理・薬理」という広い研究テーマを掲げ、単なる研究技術者(テクニシャン)ではない「優れた研究者の育成」を重視した教室運営を行っています。これは岡田正弘初代歯学部長が東京医科歯科大学の歯科薬理学講座を開設されたときからの伝統であり、岡田門下生が主任教授を勤める講座は一時期、全国29歯科大学・学部中9大学(国公立6, 私立3)を占め、我が国の歯科薬理学教育・研究をリードしてきました。研究者育成を重視した教室運営は、規模の小さな基礎系講座にあっては個々の研究者自らの発想に基づき、教室の広い研究テーマの範囲内で自由なテーマで研究を行うため、研究分野が分散・細分化し、研究の進行速度が低下する傾向にあるが、学内外の研究者との共同研究を促進することで補っています。

近年、文部科学省は「研究成果の社会への還元」を重視し、産学連携活動を奨励しています。一方で、産学連携活動に伴う利益相反状態に対して適切に対応するために「臨床研究の利益相反ポリシー策定に関するガイドライン」が作成されています。

歯科薬理学教室では今回の受賞を励みに、こうした社会情勢をふまえて、今後とも活発な研究活動を行ってゆきたいと思っております。



## 上條奨学賞(研究補助)を受賞して

口腔生化学教室 高見 正道

このたびは昭和大学創設者である上條秀介先生に因んだ歴史ある名誉な賞をいただき、とても光栄に存じます。選考委員の先生方、および私をご推薦くださった上條竜太郎先生に、心より感謝申し上げます。



振り返りますと、私が大学院を修了し昭和大学歯学部の助手として採用されてから9年が経とうとしております。採用された当時は、研究や教育システムがわからず、またそれに対応する能力も無かったため、長いあいだ周囲にはたいへんな迷惑をかけてまいりました。今回、このような名誉な賞をいただくことができたのは、私を叱咤激励してくださった先生方や、私と一緒に研究に取り組んでくださった大学院生の皆様のおかげでございます。

また、実習や講義、コンパなどを通じて歯学部の学生の皆さんからも勇気と力をいただき、それが大きな励みとなりました。

私は、大学院を含めたこれまで11年間の研究生生活のほとんどを、破骨細胞の研究に注いでまいりました。その間、優れた研究とはなんだろうか、といつも自問自答しながら破骨細胞に向き合ってきましたので、この受賞は私にとって無類の喜びでございます。今までの研究生生活ではトラブルも多く、それを乗り切るのが精一杯だった時期もございました。しかし、たくさんの人々と知り合い、そして互いに支え合って論文を完成する喜びを破骨細胞は与えてくれました。

私といたしましては、今回の受賞をこれからの励みとし、精一杯、後悔の無きよう努力して参りたいと思っております。今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 第1回 昭和大学1年次オリジナル教育検討ワーキンググループ会議に参加して

総合診療歯科 長谷川 篤司

平成19年11月23日(勤労感謝の日)、富士吉田校舎にて上記のワーキンググループ会議が開催されました。この会議は7月7日の第1回富士吉田教育部教育ワークショップの討議内容を発展させるために企画され、平成15年度から導入されているモデル・コア・カリキュラムおよび昭和大学準備教育コア・カリキュラムを検証して昭和大学オリジナルの教育カリキュラムを立案することを主旨としています。

昭和大学教育部では、医系総合大学として4学部がそろって富士吉田、しかも全寮制という環境下で教育される特徴を活かし、各学部における2年次以降の教育との連続性やニーズ、および昭和大学の教育理念(医療人としての資質涵養)などを考慮した新しいカリキュラム立案に臨んでいます。ワーキンググループは、①医療人になるためのサイエンス教育、②リメディアル教育、③ヒューマンズム教育、コミュニケーション教育の4グループからなり、歯学部からは、山田庄司教授、天野均講師(歯科薬理学)、井上富雄教授(口腔生理学)、長谷川篤司准教授(総合診療歯科)の4名が参加しました。医学部、歯学部、薬学部、保健医療学部、教育部の教員の参加により充実した討議が続き、どのグループでも最終プロダクトの完成には至らなかったため、グループ作業は引き続き継続されることとなりました。



## 第1回医療コミュニケーション・ファシリテータ養成セミナーに参加して

総合診療歯科 伊佐津 克彦

平成19年12月8, 9日に日本歯科医学教育学会教育能力開発委員会の主催で「医療コミュニケーションの教育技法の普及・啓蒙やそれに携わる教員の教育能力の向上を図る」ことを目的とした第1回医療コミュニケーション・ファシリテータ養成セミナーが開催され、参加いたしました。

具体的な内容は医療コミュニケーションの教育カリキュラムに始まり、対人コミュニケーション、ファシリテータ、医療コミュニケーション、模擬患者シミュレーション法、SPさんの本音、フィードバック、模擬患者養成法等と盛り沢山でした。参加者は24の歯学部から私も含め26名で、ワークショップ形式で実施されました。タスクフォースは勿論のこと、参加したほとんどの先生が各大学で医療コミュニケーション教育を担当されていたり、SPさんの養成に携わっていたりと、実際に現場で活躍されている先生ばかりで、多くのことを学ばせていただきました。また、現場での悩みを共有し、医療コミュニケーション教育やSPシミュレーション授業の重要性も再認識できたことから、私にとって大変有意義なセミナーとなりました。



## 平成20年度臨床研修歯科医マッチングの結果

総合診療歯科 長谷川 篤司

臨床研修医と臨床研修プログラムとのマッチング結果が平成19年10月30日に歯科医師臨床研修マッチング協議会から発表されました。全国規模ではマッチングを希望した3644名中、92.0%にあたる3354名のマッチが決定していました。研修プログラム別のマッチ者では歯科大学付属病院のプログラム29475名(87.9%)、その他プログラム407名(12.1%)でした。都道府県別、大学病院別のマッチング結果などの詳細については、歯科医師臨床研修マッチング協議会の広報資料

<http://www.d-reisjp.org/renraku1215.html> が閲覧可能となっており、同時に各研修施設の空席状況の詳細も公開されました。

昭和大学卒業生110名(新卒見込者100名、既卒者10名)のマッチング動向はマッチ者97名(新卒者88名、既卒者9名)、アンマッチ者7名(新卒者6名、既卒者1名)が確定しています。

一方、昭和大学歯科病院臨床研修プログラムの

マッチング状況は、募集定員100名に対し、100名(昭和大学卒業63名、他大学卒業37名)すべてマッチしていました。採用された100名の出身大学別内訳は、昭和大63名、日本歯科大8名、奥羽大4名、明海大4名、岩手医大4名、日本歯科新潟4名をはじめとした17大学であり、全国から広く人材が登用できたものと考えています。

## 第27回昭和歯学会例会報告

歯科理工学教室 堀田 康弘

12月1日(土)に歯科病院6階第一臨床講堂で第27回昭和歯学会例会が開催されました。一般演題16題に加え、顎口腔疾患制御外科学教室 新谷 悟教授による研究紹介講演、ならびに日本歯周病学会理事で千葉市開業の三辺正人先生による特別講演がありました。

新谷教授からは「理想の口腔癌治療を目指して」という演題で、これまで先生が研究されてきた口腔癌治療に関する紹介をされ、特に腫瘍マーカーを用いた治療法に関しては大変興味深いお話をいただきました。また、三辺先生の特別講演では「歯周病患者に対するインプラント治療はリスクか?」という演題で、先生の豊富な臨床経験をもとに、歯周病患者におけるインプラント治療において、歯周病とインプラントのリスクを対比させて考えることの重要性についてお話をいただき、改めて歯周病の病因、診断、治療を問い直す良いきっかけを与えてくださいました。この他、一般講演では基礎・臨床の垣根なく活発な意見交換が行われておりました。



## 行事予定

広報委員長 五十嵐 武

平成20年(2008年)

1月19, 20日(土, 日): 大学入試センター試験

1月27日(日): 歯学部入学試験(選抜I期・センター)

2月5, 6日(火, 水): 歯学部4年CBT試験

2月9, 10日(土, 日): 歯科医師国家試験

2月23日(土): 歯学部4年OSCE試験

2月23日(土): 歯学部大学院入試

3月12日(水): 昭和大学卒業式・謝恩会

3月15日(土): 歯学部入学試験(選抜II期)

3月27日(木): 大学院歯学研究科修了式

3月28日(金): 新歯学部5年生 登院式

## 昭和大学歯学部留学して

Liu limin

Liu 先生は、1997年に濱州医学院(中国)をご卒業後、首都医科大学(中国)の生理学教室に入局されました。2002年に同大学講師に就任され、学生教育と研究で活躍されています。

平成18年8月から本年7月までの1年間、鶴岡准教授と痛みの下行性抑制機構を研究されました。

(口腔生理学教室 教授 井上 富雄)

I am a lecturer from the Department of Physiology at Capital Medical University in China. Last August, I began my study and work in the Department of Physiology in the Dental School at Showa University. Time flies, I am about to finish my study and go back to China, but the experience during my stay in the university has impressed me deeply.



Here in Showa University, the focus of my research is to elucidate the central mechanism of pain and pain modulation by recording neuronal activity from the spinal cord dorsal horn in the rat. Although I have some knowledge and experience with electrophysiology from my previous work, I still faced many difficulties. My experiments didn't go smoothly at the beginning. In addition, I can't speak Japanese and everything seemed so foreign to me. Just when I started feeling very frustrated, many people in the department reached out to me and offered me the kindest help. I am very grateful for the kindness and consideration of Dr. Tsuruoka, as my supervisor he was always there whenever I needed help. I also want to give my special thanks to Professor Inoue, although we are not in the same group and we have very different research focus, he always like to discuss my experiments with me and gave me a lot of valuable ideas. I also want to say thank you to Miss Maeda, in addition to teaching me many experimental techniques, she helped me to understand Japanese culture, people and society. Other members in the department are also very kind to me, I remember many of them coming to ask me how I was doing and whether I was homesick.

In a word, I have spent the most memorable days of my life in Japan. During the one year study, I not only made great progress in my research, but also had a better understanding and appreciation of Japanese people and culture.

## 学会賞受賞

広報委員長 五十嵐 武

- ・大岡 貴史(口腔衛生学 助教)
- ・村田 尚道(口腔衛生学 助教)

平成19年11月24日に長崎で開催された第24回日本障害者歯科学会において、大岡先生と村田先生がそれぞれ研究奨励賞を受賞されました。この賞は2年に一度開催される国際障害者歯科学会(International Association for Disability and Oral Health)で発表した演題(ポスター)の中から2名に授与されるもので、今回は昭和大学が研究奨励賞を独占しました。

演題名(大岡):「The Relationship of Feeding Dysfunction and Gross Motor Development in Disabled Children with Cerebral Palsy or Mental Retardation」



演題名(村田):「Research on the Incidence of Halitosis in Schizophrenia Patients」



## 診療統計(平成19年11月分)

医事課課長 長谷 孝義

	患者数	1日平均	前月1日平均	前年1日平均
外来患者	17,314	752.8	712.2	741.3
入院患者	391	13.0	10.9	15.4

## 編集後記

口腔生理学教室 前田 昌子

校舎の周囲がイルミネーションに彩られ、こんなところで年の瀬を感じております。

今年のイルミネーションには英語の文字板が掛けられております。この英語表記については大学の英語の先生のところへ何と書いてあるのか、単語の意味は何か、など質問が殺到したそうです。どうやらト音記号の後に“Smile”と書いてあるそうです。心で見ると見えなくもないのですが…皆様にはどのように見えますか?皆様にとって2008年が素晴らしい年になるようお祈り申し上げます。

最後になりましたが、年末のお忙しい時期に原稿をお寄せいただきました先生方に感謝いたします。

